

FOREST LETTER 千葉県森林研究センター

このページは、森林研究センターホームページに PDF ファイルで掲載されています

山武の森から

ヤマユリの蕾も膨らみはじめ、子育て中の野鳥も盛んに囀って、山武の森は夏の装いを整えつつあります。

皆さんは森林研究センターに隣接している「さんぶの森公園」に行かれたことがありますか？ この公園に建てられている高さ40メートルの展望台に登ると、北総台地を一望することが出来ます。眼下に広がる農耕地や森林が季節ごとに織りなす原風景は心を和ませますが、先人たちの森づくりの努力を偲ばせる場所でもあります。

ここ山武地方の森づくりは18世紀の中ごろに興りました。当時、江戸で消費される膨大な建築用材や九十九里の地引網漁船の造船用材の需要を背景に、サンプスギを育てる森づくりが始まったのです。

降雨量が比較的少ないために必ずしもスギの適地でない山武での森づくりの特徴は、最初に乾燥に強いマツを植え、その成長を待って本命のスギを育てることや、利用できるまでに成長したスギを択伐（抜き伐り）によって収穫する高度な林業技術にあります。そして何よりも画期的なことは、木材として利用できるまでに成長したスギを皆伐せず択伐で収穫するという「環境に優しい森林経営技術」であることです。

森林研究センターでは21世紀に入り世界的にも環境と開発が調和する「持続可能な資源循環型の森林経営」が強く求められていることを受けて、山武の森づくりの基礎を築いた先人たちの成果を最大限に活用しながら、全研究員の英知を結集して、「千葉県の新しい森づくり技術の開発」に取り組んでいるところです。

おりしも、昨年度から行われてきました試験研究機関の外部評価の結果が5月に公表されました。この外部評価につきましてはフォレストレター35号で詳しく紹介したところですが、「経済社会情勢の急激な変化に柔軟かつ迅速に対応しながら、県民のニーズを的確に把握して効率的・効果的な研究を推進すること」を目的として県内11の試験研究機関を対象に昨年7月から実施されてきたものです。

この報告書では、「県民から高い研究活動を行っている」と評価されるためには課題の目標・方向性を明確にして研究マネジメント手法を取り入れることが必要である」さらに「県民のニーズをしっかりと把握し、情報公開していくことが重要であり、県の使命に影響ある課題を選定すべきである」と提案されております。

森林研究センターでは、今回の外部評価を踏まえ、県民からの森林に対する多様な要請に応えるため、

- バイオマス及び林産物の利用
- 里山の管理と利用方法

等、県民のニーズに即した重点課題を絞込み、産・学・官との連携により成果を早期に公表し活用できる研究体制を再構築することとしております。

先人たちが残した「山武の森づくり」の基礎を生かして、皆様方のご意見をお聞きしながら「千葉県の新しい森づくり技術の開発」を目指してまいりたいと思っておりますので、今後ともよろしく申し上げます。

（センター長 田中 元）



FOREST LETTER 千葉県森林研究センター

このページは、森林研究センターホームページに PDF ファイルで掲載されています

県民参加型の森づくり研究の成果普及とニーズを求めて

里山シンポジウムが2004年5月15日に木更津市のかずさアカデミアホールで開催され、当センターでは、会場において配布資料による技術提供の情報と研究ニーズの把握に努めました。とくに、里山と森林・林業分科会においては基調講演に研究成果の「県民参加型の森づくりの試み」が選ばれたことからこの技術提供を図り、「森林とくらし」をテーマとした討論では、パネラ - に加わるなど研究ニーズの入手に努めました。

講演では、「県民参加型の森づくり」が里山においてこれからの主役になることを示唆し、そこではどんな森づくりにするのか、手入れから活用までを考えたか、専門的な検討をしたのかなど、実践を踏まえた解説を行いました。続いて、山武地域において林業の低迷を起因にした森の荒廃が生じ、この再生が叫ばれている現状から、風土と地域の再生を目指す建築関係者グループの「さんむフォレスト」の実践報告が行われました。荒廃はかつて多くの植林が行われたサンプスギに非赤枯性溝腐病による激害が生じ、この膨大な被害材を腰板のキットなどに活用し、住宅材から燃料まで使い切る提案と活動が示されました。

討議では、サンプスギの病害、人工林や雑木林の放置、森林病虫害の発生などの森の問題、住宅環境のシックハウス症候群など森と暮らしの危機認識、林業経営の危機とそこから生じる森林の放置にいたる状況認識を参加者で共有した後、県民参加型の森づくりの活動の芽生えと広がりを願い、住宅も学校も地元森林資源の活用で活力ある里山の復活にかける道筋を見据えました。そこで、会議の提言として「これから

の森林・林業の再生には森林の公益性と役割を考慮し、地域の特質を生かした市民参加型の森づくり、森の手入れから森の資源の活用までが望まれるとしました。加えて、効率的な市民参加型の森づくりには市民、森林所有者、行政がそれぞれに役割に応じた相互協力システムの構築が必要となる」としました。

分科会を終え、県民主体の森林再生や林業振興の話題が討議されたことで、将来を見据えた新しい「森とくらし」を総じてご理解いただき「里山問題の解決への示唆を得た」などの意見が聞かれました。しかし、実践活動をこれからどうするかを求める意見や論議をさらに具体的にするために小テーマを求める意見もあり、分科会の更なる発展が期待されました。

県民参加型の森づくりなどの研究には、地域で森林の多面的機能を活かすことが求められる面で、討議にみられる幅広い意見をまとめ、活かす必要があり、現場のニーズの把握が求められると痛感するなど、このシンポジウムへの参加に意義を感じました。さらに、こうした活動に技術支援を惜しまない旨を参加者に伝えられたことにも、研究者の役割を最小限でも果たせたかと実感しました。

(環境機能研究室 小平哲夫)



FOREST LETTER 千葉県森林研究センター

このページは、森林研究センターホームページに PDF ファイルで掲載されています

長期育成循環施業における上木の直径成長からみた枝打ちの考え方

現在、森林の持つ公益的機能を低下させない施業方法として、上木の抜き伐りと下木の植栽を繰り返し多段林を長期にわたって維持する長期育成循環施業が積極的に推進されています。

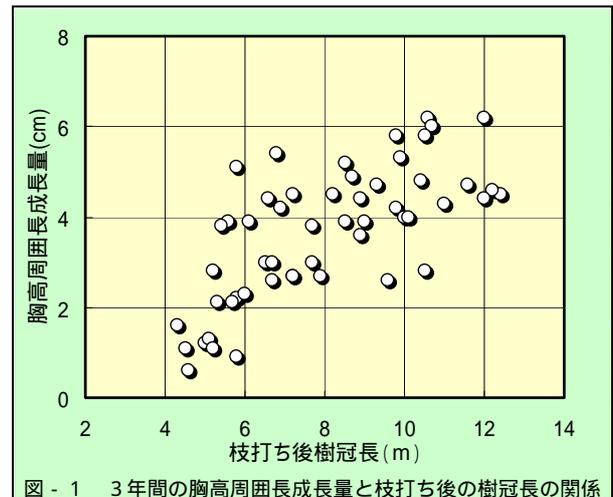
しかしながら、その施業技術については未解明な部分が多く、特に上木の伐採が制限されることからそれに対応した林内光環境改善のための技術開発が必要となっています。そこで、今回はその一つの方法である上木の枝打ちについて、それが上木の直径成長にどのような影響を与えるかという面から検討してみました。

調査地は、鴨川市にある嶺岡山県有林の1914年植栽(2003年時90年生)のヒノキ林です。このヒノキ林は大径材生産を目的とした長伐期林であり、現在は下木にヒノキやスギが植栽され複層林として管理されています。このヒノキ林内の53本について枝打ちと直径成長の関係を調査しました。調査木の平均樹高は19.5m、平均胸高直径は39.7cmであり、立木密度は150~250本/ha程度と低く孤立木に近い状態で管理されています。

枝打ちは2000年1~3月に行いました。処理の区分は、枝打ちをしないものが21本、強度を変えて枝打ちしたものが32本です。処理後の枝下高は6.6~15.5mであり、処理後の樹冠長(樹高-枝下高)は4.3~12.4mとなりました。直径成長については、成長バンドにより胸高位置の幹まわり(胸高周囲長)の変化をミリメートル単位で測定しました。成長バンドは枝打ち後の2000年4月6日に設置し、2003年1月20日に3成長期分の成長量(胸高周囲長成長量)を測定しました。

図-1は、3年間の胸高周囲長成長量と枝打ち後の樹冠長の関係を示したものです。個体によ

るバラツキが大きいものの、胸高周囲長成長量は枝打ち後の樹冠長が大きいものほど大きくなる傾向を示しました。



FOREST LETTER 千葉県森林研究センター

このページは、森林研究センターホームページに PDF ファイルで掲載されています

森林研究センターの動き**視察・見学・相談について**

森林研究センターでは、森林・林業に関する各種の試験研究を行っていますが、そのほかに施設見学や様々なご相談などにも応じています。今回はその様子的一端をご紹介します。

〔視察・見学〕

春。森林研究センターはいろいろな桜の花で彩られます。まず、寒桜から始めて彼岸桜、各種の枝垂桜、染井吉野、山桜、そして豪華な各種の八重桜に移りますが、何といっても人気はうす緑色の花びらを持つ、御衣黄(ぎょいこう)と鬱金(うこん)です。見学者は年配の方が多く、センターの桜は根強い人気を持っています。

初夏～夏。校外学習の小・中学生などが多く訪れ、構内は元気な声で一杯になります。特に、小鳥や昆虫、外国産の樹種は大人気です。

秋～冬。県内のほか他県の見学者も多く、サンプスギと複層林施業の先駆である山武林業は依然興味の対象になっています。晩秋～初冬、森林研究センターは紅葉に彩られ、たくさんの木の実が落ちます。この時期は校外学習の子供達の訪問もありますが、見学者は桜の時期ほど多くなく、むしろ静かな佇まいになっています。

〔相談〕

森林研究センターは相談内容として 森林の生態、森づくり、森の役割、森林の病害虫、キノコ、タケノコ、クリの栽培法の5つを上げていますが、最近の相談は、必ずしもこの5つに限られている訳でなく、家屋や家具に発生する害虫からログキャビンの相談まで様々です。森林・林業に関することなら、お気軽にご相談ください。

主な会議・行事 (H16.4～5)**1 林業関係全体会議**

平成16年4月15日、教育会館にて開催され、田中センター長が出席した。

2 第2回試験研究機関評価委員会

平成16年4月26日、教育会館にて開催され、田中センター長が出席した。

3 公設試験研究機関研究交流会議

平成16年5月11日、県庁にて開催され、田中センター長が出席した。

4 平成16年度要望課題検討会

平成16年5月27日、森林研究センターにて開催され、全研究職員が出席した。

5 平成16年度関東・中部林業関係試験研究機関連絡協議会総会

平成16年5月28日、都道府県会館(東京都)で開催され、松原次長が出席した。

6 平成16年度千葉県農林水産技術会議

平成16年5月31日、教育会館にて開催され、田中センター長と石谷主席研究員が出席した。

雑報**人事異動 (3月31日付け)**

次 長 岩井宏寿(定年退職)
室 長 富谷健三(定年退職)
主席専門技術員 長谷川忠三(定年退職)

人事異動 (4月1日付け)

事務所長 鈴木和彦(中部林業事務所へ)
センター長 田中 元(中部林業事務所から)
次 長 松原 功(林務課から)
室 長 太田幸夫(みどり推進課から)
室 長 小平哲夫(環境機能研究室へ)
主席専門技術員 佐野一男(林務課から)
主 査 中嶋 正(がんセンターへ)
上席専門技術員 岩澤勝巳(林務課へ)

(編集責任 松原 功)